

池田家文庫絵図展

いく しろ
戦さと城



大坂夏御陣図 T12-16



岡山大学附属図書館
電話：086-251-7322
URL：www.lib.okayama-u.ac.jp



岡山市デジタルミュージアム
電話：086-898-3000
URL：www.okayama-digital-museum.jp

平成18年10月26日(木)～11月12日(日)

会場：岡山市デジタルミュージアム

主催：岡山大学附属図書館 岡山市デジタルミュージアム

<2006>

いく しろ 「戦」と城

池田家文庫 絵図展解説

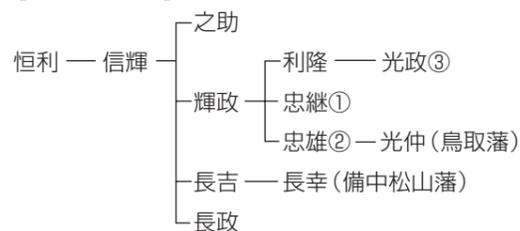
戦国から「徳川の平和」へ

今から500年ほど前の戦国時代は、各地で戦さが繰り返られていた。大名から僧侶・庶民までが武器を持ち、城を築き、みずからの土地や利権を守るために戦った。その戦いに勝ち残った武士たちが、江戸時代の支配者になった。戦国の時代を終わらせ天下を統一したのは、豊臣秀吉である。しかし、朝鮮出兵の失敗と秀吉の死を機に、豊臣政権は分裂、関ヶ原での天下分け目の戦さになった。これに勝利した徳川家康は江戸に幕府を開き、2度の大坂の陣で豊臣氏を滅ぼした。その後3代将軍徳川家光の時代に、島原の乱が起きる。これが武力で鎮圧された後は、国内では大規模な戦闘は起こらず、200年間にわたる「徳川の平和」が訪れた。

池田家と合戦

池田家は、美濃国（現岐阜県）出身の土豪と言われている。天下統一をめざした織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕えて頭角をあらわし、さまざまな戦闘に参加した。そのなかで次第に成長し、姫路城主として52万石を領有する大大名になった。

【池田家略系図】（丸数字は岡山藩主の代数）



池田氏が織田家に仕えたのは、恒利の時からである。子の信輝は、織田信長の家臣として桶狭間合戦など各地の戦

闘に参加した。元龜元年（1570）、天下統一をめざす信長は、越前の朝倉義景、近江の浅井長政と戦った。いわゆる姉川合戦である。信輝は、二番手を命じられ、手傷を負いながら、大いに戦功をあげた。この戦さには、信輝長男の之助も13歳で初めて参加している。このころ信輝は、信長から尾張犬山城を与えられ、大名への道を歩み始めた。

天正3年（1575）信長は長篠合戦で武田勝頼を破った。鉄砲隊が威力を発揮した戦闘として有名だ。この時信輝は、滝川一益・柴田勝家とともに「中之先」を勤めている。「右之先」は徳川家康、「左之先」は佐久間信盛であった。天正8年（1580）信長は荒木村重を滅ぼした。その花熊合戦に、輝政が16歳で父・兄とともに参加し、功名をあげている。2年後の天正10年（1582）、本能寺の変が起こり、信長は志半ばに亡くなった。

信長の跡を継いだ豊臣秀吉は、織田信雄と結んだ徳川家康と対立し、両雄が直接戦うことになった。いわゆる小牧・長久手合戦である。秀吉に味方した信輝は、一番手となって徳川の本拠である三河を攻めたが、逆に長久手で徳川勢に後方を攻められ、子の之助とともに戦死した。この合戦の後、秀吉は家康と和睦する。池田の家督は次男の輝政が継いだ。

天正18年（1590）秀吉は小田原城に北条氏を攻め、滅ぼした。これによって、天下統一が実現した。小田原攻めの後に輝政は東三河四郡15万2000石を与えられ、吉田（現豊橋）に在城、吉田侍従と呼ばれた。その後、家康の二女富子（良正院）を継室に迎えたこともあって、徳川家との結び付きが強まった。なお、秀吉の朝鮮出兵の時には、輝政は肥前名護屋への物資の輸送などを担当し、出兵は命じられなかった。

関ヶ原から島原まで

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで、輝政は家康に従

って会津の上杉景勝を攻め、その後取って返して岐阜城攻撃に参加、大いに戦功をあげた。そのため戦後には、播磨国52万石余を与えられ、姫路に在城することになった。さらに慶長8年（1603）には輝政次男の忠継に備前国が与えられ、慶長18年（1613）輝政が亡くなると、姫路城は長男の利隆が受け継いだ。

慶長19年（1614）・元和元年（1615）の大坂冬の陣・夏の陣では、利隆が軍勢を率いていち早く参加した。その後、元和3年（1617）に利隆が亡くなり光政が跡を継いだが、幼少であったため因幡・伯耆両国32万石を与えられ、鳥取に転封となった。他方、備前国は、忠継の死後は輝政の三男忠雄に与えられていたが、寛永9年（1632）忠雄が亡くなると、子の光仲が幼少であったため、同族の光政との間で国替えが行われ、光政が岡山藩主となった。

寛永14年（1637）、領主の苛政とキリスト教弾圧に抗議して、天草・島原地方の農民が蜂起した。中心となったのは、立帰（棄教していたが、信徒に復帰した）キリシタンたちであった。かれらは、富岡城や島原城を攻めた後、原城に籠もった。幕府は九州地方の大名に大軍を派遣させ、これを攻めた。当時江戸にいた池田光政は国元に指示を出し、幕府役人の渡海を助けるために藩船を大坂に派遣させたり、島原に情報収集のための使者を送ったりした。翌年2月原城は落ち、多くの籠城者がなで切りにされた。これを機に幕府はポルトガル船の来航を禁止し、いわゆる「海禁」体制をとることになった。

戦さと城の絵図

江戸時代には、戦国時代以来の戦闘や戦場、城郭を描いた絵図が作成された。池田家文庫にも、そうした絵図が多数残されている。それらは、作成の目的や関心からみて、次の4つのタイプに分けることができる。

1つは、戦陣や戦闘の様子を後代に伝えるための記録と

して作られたもの。こうした絵図は、先祖の功績をたたえたり、家の歴史を伝えるために、後の人によって作られる場合が多い。そのため、誇張や作為が加えられることもある。同じような記録には、文字で書かれた軍記物語や家譜、絵画による戦陣図屏風などがある。戦陣絵図は、内容的にも視覚的にも、文字と絵画の中間といった性格だろう。池田家文庫では、池田家が過去に関わった戦さや城が主に取り上げられることになる。

2つは、戦場や戦闘を直接に見聞した人がそれを第三者に伝えるために書き付けたもの。これは、同時代の一次史料となるものだが、その実用性のために簡略な描写のものが多く、池田家文庫では、島原の乱の際に光政が派遣した使者のもたらした絵図があり、貴重な史料となっている。

3つは、兵学・軍学の学習や教授用に作られたもの。江戸時代には、甲州流の軍学（小幡流・北条流・山鹿流などに分かれた）が盛んであったから、武田信玄に関わった戦闘が例として取り上げられることが多かった。ただし、図上で理論を確認するためのものなので、実際とはかけ離れており、描写も概念的である。兵学では城郭の縄張りも研究の対象であった。そのために、実際の城の縄張りを写したり、理想の縄張りを創作したりすることが行われ、その図が残された。

4つは、地誌としての戦場図や城郭図。江戸時代の中頃以降、地域の文物を網羅的に記録した地誌が作られるようになるが、そのなかには必ず古戦場や古城跡が取り上げられた。それを絵図化したものが、このタイプの絵図である。ただし、図像としては、1つ目の記録としての絵図や3つ目の兵学用絵図と同じようなものになりやすい。

さまざまなタイプの戦陣絵図や城郭絵図を比べて見ることと、江戸時代の人びとの戦さや城に対する関心のあり方について考えることができるだろう。

展示品解説

1 信長記全15巻 (重要文化財)

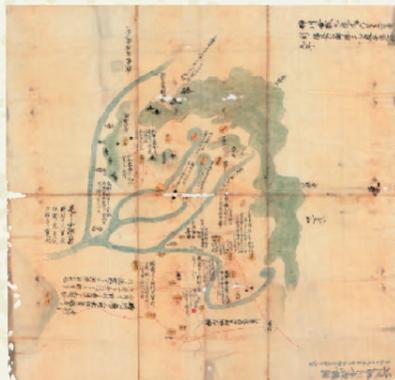
太田牛一・自筆本 慶長15年(1610)
貴-48 24.2cm×17.0cm



織田信長が上洛した永禄11年(1568)から、本能寺の変で亡くなる天正10年(1582)までの15年間を記した軍記物語。池田家の注文によって書かれた著者牛一の自筆本。天正8年(1580)の花熊合戦で初陣を飾った池田幸新(のちの輝政)が、父勝三郎(恒興、のちに信輝)や勝九郎(之助)とともに功名をあげ、信長から「感状」をもらったことが、特別に書き加えられている。

2 江州姉川合戦絵図

T12-108-10 81.5cm×85.0cm



端裏に「江州姉川合戦絵図／享保十二末(1727)七月五日平野与兵衛殿より参ル写」とある。余白部分に、「姉川合戦、元龜十(元年の誤り、1570)年六月廿六日辰ノ刻二信長公御勝ニナル、慶安迄七拾九年」とあるから、原図は慶安元年(1648)に書かれたものと思われる。姉川をはさんで北に朝倉・浅井軍、南に織田軍が対峙する様子が描かれている。「今庭村」の横に、「先陣八坂井右近、二ノ目池田勝三郎(信輝)、御先手坂井・池田・木下、以下十三段」と書き込まれている。

3 尾州犬山城ノ図

T3-113 28.3cm×40.7cm



犬山城の縄張りおよび城下町の様子を描いた略図。端裏に「尾州犬山城ノ図」とある。兵学用に、全国の城郭・城下町の絵図を集成したものの1枚か。「天正十九年池田勝三郎信輝」とあるのは誤り。信輝が犬山に在城したのは、元龜元年(1570)から天正九年(1581)まで。筆者と思われる「松田久鎮」は松田孫八郎。寛政元年(1789)に23歳で代官になっており、知行は100石。

4 家中諸士家譜五音寄 夕・チ

寛文9年(1669)
D3-3037 26.4cm×21.1cm

岡山藩の主な家臣の家について、先祖以来の奉公の履歴を書き上げたもの。家臣の奉公書上は寛永21年(1644)に次いで2度目で、この後、元禄9年(1696)からは「奉公書」として定期的に書き継がれた。寛文9年(1669)度のもは、五音順に並べられているので「五音寄」と呼ばれている。現在は「ア」行分の1冊が失われ、「イ」行以下20冊が残されている。これによって確認できる家臣数は707家。家臣の履歴を通じて、藩政の動きについても知ることができる。

竹村小平太の祖父竹村喜左衛門は尾張国長野の出身で、勝入(信輝)に仕えた。姉川合戦をはじめ各地の戦場で功名をあげたことが記されている。

5 池田恒興宛織田信長朱印状

〔天正元年(1573)〕9月7日
C9-57 29.0cm×45.2cm

「天下布武」の朱印が押された信長の書状。内容は、それまで池田勝三郎(恒興・信輝)が知行していた木田小太郎跡職を、息子の古新(輝政)に譲与することを認め、安堵するというもの。輝政は10歳になったばかりであった。

6 長篠合戦之絵図

T12-9 69.1cm×100.5cm



袋入り。端裏に「長篠合戦之絵図 長定 友直書」とある。図中向かって左手に朱色で武田勢が示され、右手に織田勢が対峙している。織田信長本陣の前方に「池田勝入(信輝)」の陣が見える。絵画的に描かれているが、やはり兵学用の絵図か。

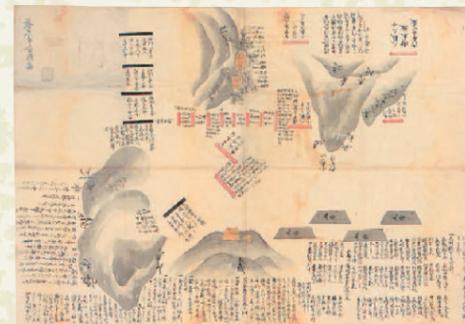
7 家中諸士家譜五音寄 八

D3-3036 26.4cm×21.1cm

番兵左衛門の曾祖父番藤左衛門は、尾張国知多郡荒尾の出身で、勝入(信輝)に仕えた。長篠合戦や長久手合戦で功名をあげたことが記されている。

8 長久手合戦ノ図

T12-108-1 57.4cm×83.0cm



端裏に「長久手合戦ノ図」とある。徳川勢は朱色、豊臣勢は墨色で示されている。簡略な表現ではあるが、余白部分に戦闘の経過などが書き込まれており、記録としての戦場図と考えられる。三河岡崎攻めの先陣として「池田庄入(勝入・信輝)」があり、「手勢六千、組六千、合者万弍千」とある。

9 長久手古戦場之図

T12-115 107.6cm×103.5cm



表紙が付けられ、題箋に「長久手古戦場之図」とある。天保11年(1840)10月付けの尾張藩士富田敏の識語があり、この時に作られたと考えられる。戦陣図というよりは、古戦場案内図のようなものであり、地誌的関心が強い。岡山藩からの依頼を受けて、現地の状況を描いたものだろうか。陣取りや戦闘の様子も書き込まれており、特に「池田勝入」についての書き入れが目立つ。

10 参州吉田御城図

T3-97 40.7cm×84.7cm



吉田城(現豊橋)の縄張りおよび城下町の様子を描いた略図。端裏に「参州吉田御城図」とある。兵学用に、全国の城郭・城下町の絵図を集成したものの1枚か。余白の書込のうちに「天正十八年十五万石 池田三左衛門輝政」とある。池田輝政は、天正18年(1590)から慶長5年(1600)まで吉田に在城した。

展示品解説

11 関ヶ原合戦之図

T12-4 122.4 cm×190.6 cm



岐阜城攻めから関ヶ原での決戦までを1枚に描いた大絵図。余白部分に「寛延二己巳歳四月朔日、於江府濃州関原本陣ヨリ求之、写置成」とあり、関ヶ原宿本陣にあった絵図を寛延2年(1749)に写したものであることが分かる。池田家にとっての記録として残しておこうとしたものだろう。朱色丸印が西軍、墨色丸印が東軍を現している。岐阜城周辺では、池田三左衛門(輝政)の陣所や中町からの「池田三左衛門攻口」も記されている。

13 吉田侍従宛徳川家康書状

〔慶長5年(1600)〕8月26日
C9-77-1 36.8 cm×54.3 cm

吉田侍従(池田輝政)の注進状に対する家康の返書。岐阜城攻めにおいて、西軍の軍勢数千人を打ち捕らえたことを「誠に心地能き義」と賞している。この功績が、関ヶ原戦後の播磨一国拝領につながった。

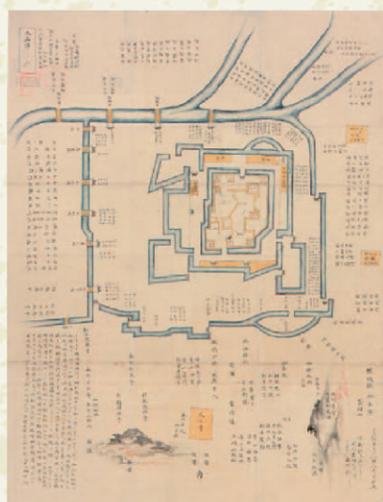
14 池田家履歴 三

A8-55 23.5 cm×16.2 cm

岡山藩主の事績を中心に藩政の重要事件を編年体で記録した、いわゆる「池田家履歴略記」の諸本のうち、最も原本に近いと考えられているもの。欠本があり、現存は26巻26冊。作者は、岡山藩士で文人学者でもあった斎藤一興。慶長5年(1600)の「攻岐阜城」の項では、池田家の活躍が克明に記されている。

15 大坂冬御陣図

T12-13 104.6 cm×79.4 cm



もと8枚1組の大坂陣絵図のうちの1枚。現存は7枚。「冬御陣 三」とあり、大坂城を包囲する徳川方の陣形を描いたもの。余白部分に戦闘の経過が簡潔に記されている。天神橋に書かれた「松平武蔵」が池田利隆のことだろう。

12 関ヶ原合戦之図

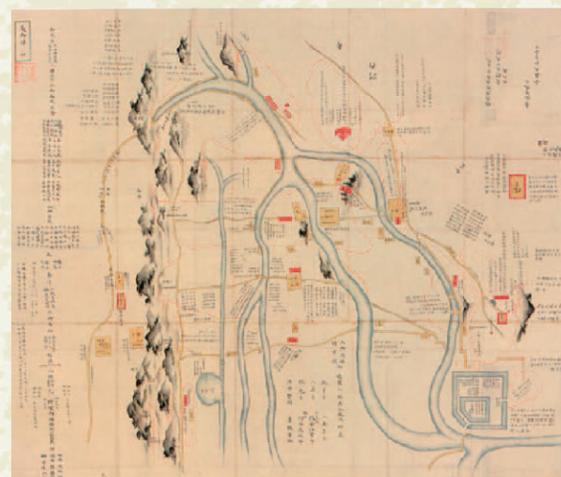
T12-31 55.0 cm×81.0 cm



大坂城攻めから関ヶ原での決戦までを描いた図。西軍は朱○印、東軍は朱△印で示される。余白部分に戦闘の経過が細かく記されており、絵画的な表現も目立つ。地誌的な関心による絵図と言っていいだろう。垂井の南宮山麓に「吉田侍従」(池田輝政)の名が見える。

16 大坂夏御陣図

T12-14 107.8 cm×129.2 cm



もと8枚1組の大坂陣絵図のうちの1枚。「夏御陣 四」とあり、夏の陣の際の広域にわたる攻防を1枚に描いたもの。各地での戦闘の様子が細かく記録されている。「堺浦、松平武蔵守兵船三百艘二而相詰」とある。

17 大坂夏御陣図 [表紙] 写真

T12-16 108.4 cm×116.0 cm

もと8枚1組の大坂陣絵図のうちの1枚。「夏御陣 六」とあり、大坂城周辺での最後の攻防を描いた図。朱色が豊臣方、墨色が徳川方。両軍武將の幟旗や馬印なども書き込まれている。

18 大坂城図

T3-88 92.7 cm×74.4 cm

徳川時代の大坂城を描いた図。大坂の陣後の再建で、豊臣時代よりは、土台もかさ上げされ、天守閣も高くなった。渡辺丹後守(吉綱・玉造口定番)・米津出羽守(由将・京橋口定番)・青山因幡守(宗俊・城代)の任期が重なるのは、寛文6年(1666)から同8年(1668)までであり、その頃の状況を示すものと思われる。

19 池田利隆宛戸川達安書状

〔慶長19年(1614)〕10月16日
C9-23 35.0 cm×51.2 cm

大坂冬の陣への出兵にあたって、備中庭瀬藩主戸川達安が姫路藩主池田利隆に送った書状。尼崎・西宮の間で、利隆の陣の近くに控えたいとの希望を伝えている。「備前衆」とあるのは、岡山藩池田忠継の軍勢のことだろう。

20 松平新太郎宛年寄衆連署奉書

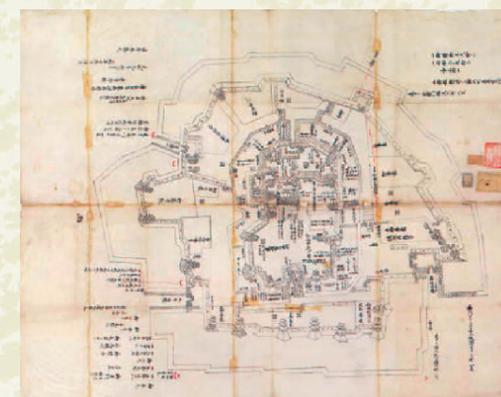
〔元和5年(1619)〕9月16日
C9-52-1 40.5 cm×57.6 cm

徳川幕府の年寄衆(のちの老中)が將軍の意を奉じて松平新太郎(池田光政)にあてた書状。来年の三月朔日から大坂城の石垣普請を仰せ付けるので、用意をするように命じている。ただし、光政本人が上る必要はないとも述べている。

21 松平新太郎宛徳川秀忠黒印状

〔元和6年(1620)〕11月21日
C9-52-3 46.6 cm×65.0 cm

將軍秀忠が、松平新太郎(池田光政)へ直接に感謝の意を伝えた直状。大坂城普請の完成に際して、その苦勞をねぎらっている。黒印状にふさわしく、用紙も大判の檀紙が使われている。



おおさかじょうず
18 大坂城図

しまばらせんちのず 22 島原戦地之図

T12-39 155.8 cm×159.2 cm



島原半島全体と周辺地域を描いた図。端裏に「島原戦地之図」「故大御納戸」の貼紙がある。余白部分に「上様へ上り候絵図のうつし」と書かれた貼紙があり、光政が派遣した使者がもたらした絵図だと分かる。「有馬南の古城」とあるのが原城。「天草之内 大やな」(大矢野島)には「寺沢殿領分、眞理志端共此所より起初ル」と書かれている。

ひぜんしまばらせんちのず 23 肥前島原戦地之図

T12-37 84.0 cm×85.2 cm



原城攻めの陣取りを描いた略図。端裏に「肥前島原戦地之図」「故大御納戸」の貼紙がある。「上様江上り絵図書写」と書かれた付紙があり、光政が派遣した使者がもたらした絵図と分かる。寺沢・有馬・鍋島・橘花(立花)・細川など、九州の諸大名の名が見える。

ひぜんしまばらせんちのず 24 肥前島原戦地之図

T12-40 111.4 cm×117.6 cm



原城攻撃の様子を描いた図。端裏に「肥前島原戦地之図」「故大御納戸」の貼紙がある。築山・せいらう(井楼)・柵・金掘入など、城攻めの工作が細かく描かれている。朱の線は、最終的な城への突入ルートを示しているのだろう。沖に浮かぶ黒く塗られた船は、オランダ船か。付紙などはないが、光政が派遣した使者の報告に基づく図だと考えられる。

ひぜんのくにとみおかじょうず 25 肥前国富岡城図

T3-8 55.2 cm×116.8 cm



富岡城と立歸キリシタンによる攻撃の様子を描いた図。唐津藩は天草諸島に4万石の領地を持っており、富岡城には城代として三宅藤兵衛が居た。貼紙で天草13か村のキリシタン勢や城を守る側の唐津よりの加勢・有馬の加勢などが示されている。この後、天草のキリシタン勢は島原勢と合流して、原城に籠もる。

にわりょうぞうほうこうがき 26 丹羽良造奉公書

D3-1961 28.0 cm×20.6 cm

奉公書は、岡山藩が家臣に先祖の由来や代々の勤役などの履歴を書き上げさせて、提出させたもの。元禄9年(1696)以降ほぼ5年ごとに書き上げられ、現在3423家のものが残っている。

丹羽次郎右衛門は、寛永8年(1631)に鳥取で召し抱えられた新参者。知行を千石も与えられているから、特別な人脈や能力があったのだろう。幕府が上使として派遣した板倉重昌・石谷貞清への付使として、光政によって島原へ送られた。丹羽は現地で情報を収集し、陣取りや攻撃の様子を絵図に認めて光政のもとへ注進している。光政はいずれ出陣の命があるかもしれないと考えて、状況把握に努めていたようだ。

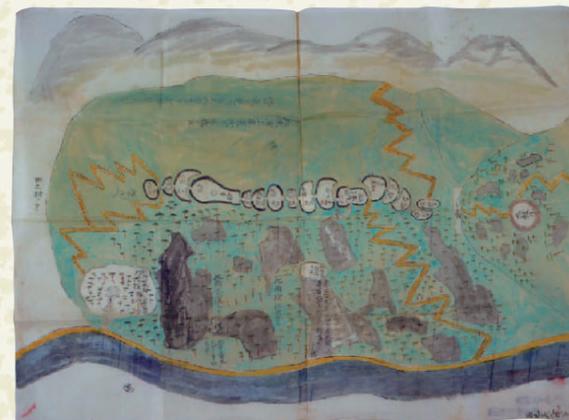
かちゅうしよし か ふ ごいんよせ 27 家中諸士家譜五音寄

D3-3046 26.4 cm×21.1 cm

中村主馬は、知行千五百石の船奉行。島原の乱が起ると、光政の命で藩船を率いて大坂に詰め、幕府の上使を輸送する御用などを勤めている。

びぜんのくにわ けぐんてんじんやまこじょうず 28 備前国和気郡天神山古城図

T3-275 40.0 cm×54.6 cm



戦国時代に浦上宗景が居城とした天神山城の縄張りを描いた図。谷や平、尾根などの様子も記されていて、実際に現地を見分して描いたものと思われる。模写した「高見義之」については不明。28・29・30の3枚は、地誌的な関心に基づくものと考えていいだろう。

びぜんのくにみ のぐんはらむらふなやまじょうず 29 備前国御野郡原村舟山城図

T3-276 28.3 cm×40.7 cm



端裏には「御野郡原村船山古城」の貼紙がある。村の背後の山尾根に旭川を望むように構築された小規模な村の山城。戦国期にこのあたりに勢力を持っていた須々木氏の持ち城と言われている。曲輪は2段で、土塁や掘切などの防御が施されている。曲輪の広さなども書き込まれているから、現地を実測して書かれたものと思われる。作者の「俣野三百三」は不明。

みのぐんむら こじょうのず 30 御野郡ミノ村ツル古城之図

T3-278 24.1 cm×36.7 cm



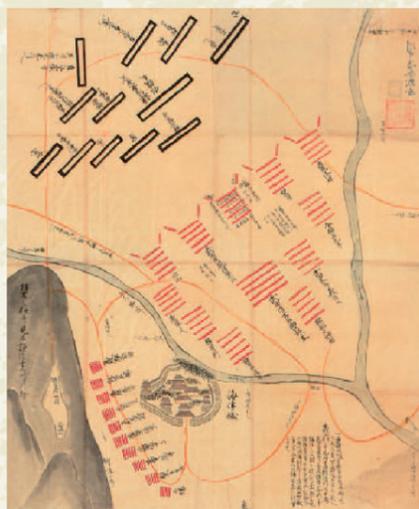
端裏に「御野郡三野村釣古城」の貼紙がある。旭川に面した尾根上に作られている。一般には明見山城と言われ、須々木氏の勢力下にあった山城と考えられている。船山城と防御施設の工作などがよく似ており、同一主体による同時期の構築と考えて間違いのないだろう。曲輪は3段に構築されているようだが、最上段にのみ広さが書き込まれている。

展示品解説

31 川中島合戦図

かわなかじまかつせんず

T12-5 82.2 cm×67.7 cm



永禄4年(1561)9月10日に起きた川中島合戦を描いた戦陣図。32・33および「信州上田図」とともに4枚が1つの袋に入っている。小幡流の兵学に関する図と思われる。朱色が武田信玄勢、墨色が上杉謙信勢である。

33 相州三増合戦之図

そうしゅうみませかつせん の ず

T12-7 68.4 cm×93.0 cm



永禄12年(1569)10月8日に起きた三増合戦を描いた戦陣図。小田原城を攻めようとした武田信玄を北条勢が迎えて戦った。朱色が武田勢、墨色が北条勢。この後武田勢は箱根湯本を越えて、風祭あたりまで進んだ。

32 信州戸石合戦之図

しんしゅうとしかつせん の ず

T12-6 42.4 cm×55.2 cm

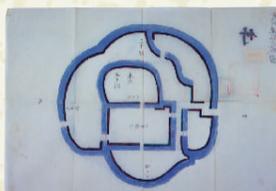


天文19年(1550)9月に起きた戸石合戦(戸石崩れともいう)を描いた戦陣図。朱色が武田勢、墨色が村上義清勢である。村上氏は北信濃地方に勢力を持っていた国人領主。信玄は、この合戦を含め2度にわたって義清に敗北している。図中に「天文十五年三月九日」とあるのは誤り。天文19年であれば、信玄は30歳である。

34 武州深谷古城図

ぶしゅうふかや こじょうず

T3-128 27.6 cm×40.5 cm



兵学学習のために描かれた深谷古城の縄張り図。作者は「利和」。端裏に「竹」とあるのは、出来栄への評価か。35・36と並べてみると、3者3様の描き様比べられる。

35 武州深谷古城図

ぶしゅうふかや こじょうず

T3-129 27.4 cm×39.3 cm



兵学学習のための縄張り図。余白に「今日八酒お不給、上手、大平」とある。34との違いは、堀に木橋が書かれていること。端裏の書込は「頭」。

36 武州フカヤ古城之図

ぶしゅう こじょうの ず

T3-130 24.3 cm×35.5 cm



兵学学習のための縄張り図。堀は「アイ」、土塁は「モエギ」と色の指示があり、下書きか。作者の「石田維忠」は、石田助之進(のち鶴右衛門)。文化3年(1806)19歳で若様附御側小姓になり、家督後の知行は250石。端裏の書込は「治」。

37 齊輝君御分西海道城々図

なりてるぎみおんぶんさいかいどうしろじろず

T3-283~319



西海道諸国の城郭・城下町図37枚が1袋に入っている。斉輝は8代藩主斉政の長男。寛政9年(1797)11月5日生まれ、幼名は新之丞。文化12年(1815)2月19日、内蔵頭に任じられ、斉輝と改名。文政2年(1819)3月18日に亡くなった。斉輝の兵学学習用に、家臣たちが描いた図を集めて1袋に入れたものと思われる。

38 肥前島原城図

ひぜんしまばらじょうず

T3-310 28.2 cm×40.8 cm

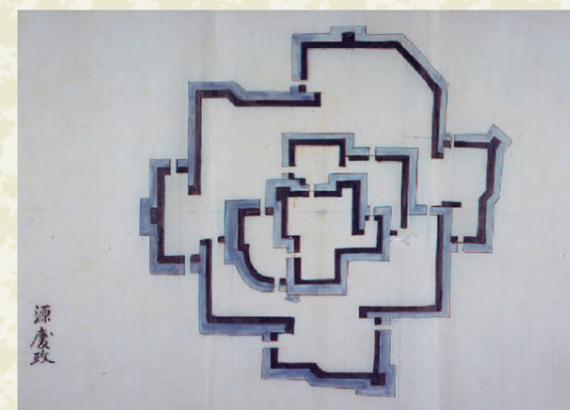


37の袋に入れられていた37枚のうちの1枚。肥前島原の城下町を描いている。「松山敬直」を朱筆で消し、「青地守節」とある。青地守節は、青地謙之介(のち藤右衛門)。文化4年(1807)に22歳で若殿様附小姓になっており、知行は250石。端裏の書込は「治」。

39 御制城図

ごせいじょうず

T3-351 28.1 cm×40.6 cm

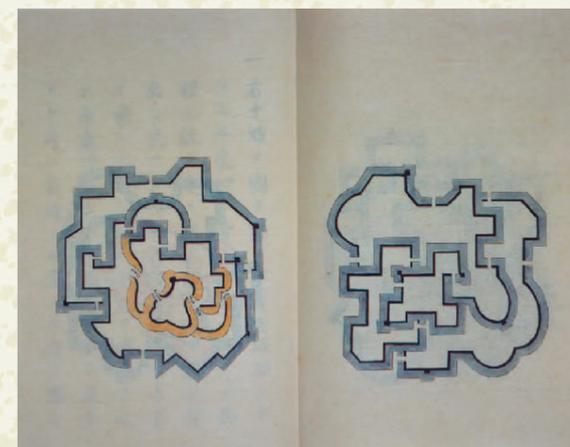


表紙・裏表紙とも33枚1綴り。兵学の学習用として作成した縄張り図を集成したもの。作者は「源慶政」、10代岡山藩主池田慶政。豊前中津藩主奥平昌高の4男で、天保13年(1842)に9代岡山藩主池田斉敏の養嗣子となった。図中に書き込まれた日付から、天保13年・14年に描かれたものと思われる。時に慶政は、20・21歳であった。

40 十城図・城図解

じゅうじょうず しろずかい

T3-325・326 20.2 cm×14.0 cm



城郭の縄張りについて論じた兵学書。2冊が括られ、包紙に「上ル」とあるから、藩主の学習用として上呈されたものと思われる。

(岡山大学文学部 倉地克直)